

国内の畜産物の需給動向

牛 肉

8 年 7 月の牛肉生産量、前年同月比0.9%減

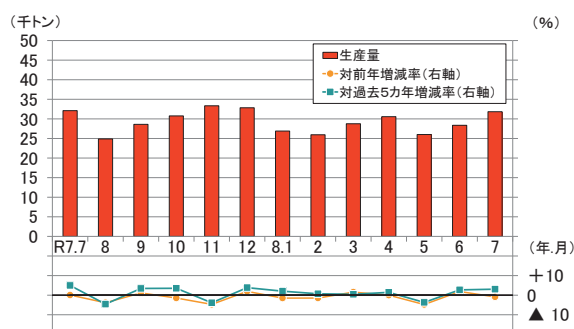
生産量

令和8年7月の牛肉生産量^(注1)は、3万1830トン（前年同月比0.9%減）と前年同月をわずかに下回った（図1）。品種別では、交雑種は8280トン（同0.3%減）と前年同月並みとなった一方、和牛は1万7606トン（同1.1%減）、乳用種は5895トン（同0.8%減）と、ともに前年同月をわずかに下回った。

なお、過去5カ年の7月の平均生産量との比較では、3.1%増とやや上回る結果となった。

（注1）生産量の合計は、その他の牛、子牛を含む。

図1 牛肉生産量の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

輸入量

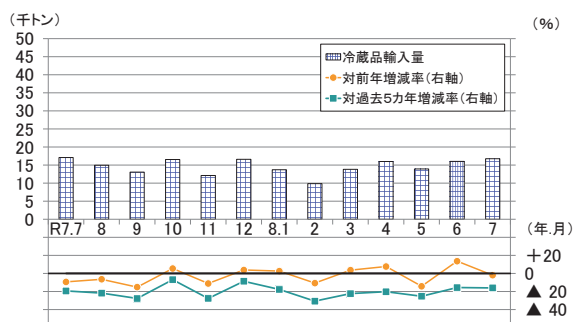
7月の輸入量について、現地価格の高止まりや為替相場の影響などがある中、冷蔵品では、主要輸入先である豪州産の輸入量は増加

した一方、米国産の輸入量が減少したことから、1万6768トン（前年同月比1.9%減）と前年同月をわずかに下回った（図2）。冷凍品では、豪州産のうち主に加工用のひき材などに使用されるトリミングの輸入量が増加した一方、米国産ショートプレート（バラ）の輸入量が減少したことなどから、2万6617トン（同10.7%減）と前年同月をかなりの程度下回った（図3）。この結果、輸入量の合計^(注2)でも、4万3431トン（同7.4%減）と前年同月をかなりの程度下回った。

なお、過去5カ年の7月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は16.0%減と大幅に、冷凍品は4.3%減とやや、いずれも前年同月を下回る結果となった。

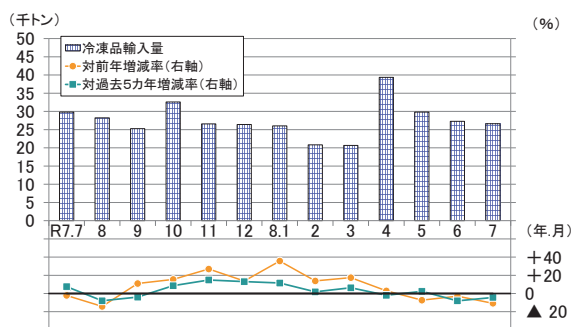
（注2）輸入量の合計は、煮沸肉、ほほ肉、頭肉を含む。

図2 冷蔵牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

図3 冷凍牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

家計消費量等

7月の牛肉の家計消費量（全国1人当たり）^{（注3）}は151グラム（前年同月比1.3%減）と前年同月をわずかに下回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の7月の平均消費量との比較でも、8.9%減とかなりの程度下回る結果となった。

7月の外食産業全体の売上高は、台風の影響を受けた前月から一転して比較的天候が安定し、西日本を中心に酷暑日があったものの、記録的な猛暑に悩まされた前年と比較して、極端な高温が和らいだことも客足の回復につながり、前年同月比6.8%増と前年同月をかなりの程度上回った。一方、各社はコラボキャンペーンなどさまざまな施策を展開して集客に努めているが、消費者に向けた値頃感への訴求の有無が集客を左右する状況も散見され、引き続き難しい舵取りを迫られている状況にある（一般社団法人日本フードサービス協会「外食産業市場動向調査」）。

このうち、食肉の取り扱いが多いとされる業態として、ハンバーガー店を含むファストフードの洋風は、一部ではシステム障害によるメニュー制限が客数に影響したが、引き続き期間限定商品やキャンペーンなどが好評で

あったことから、同7.6%増と前年同月をかなりの程度上回った。また、牛丼店を含むファストフードの和風は、人気メニューの復活や人気ゲームとのコラボなどにより、同9.5%増と前年同月をかなりの程度上回った。ファミリーレストランの焼き肉は、客数は各社まちまちであったが、ランドメニューの刷新などで集客が好調であったこともあり、同8.2%増と前年同月をかなりの程度上回った。

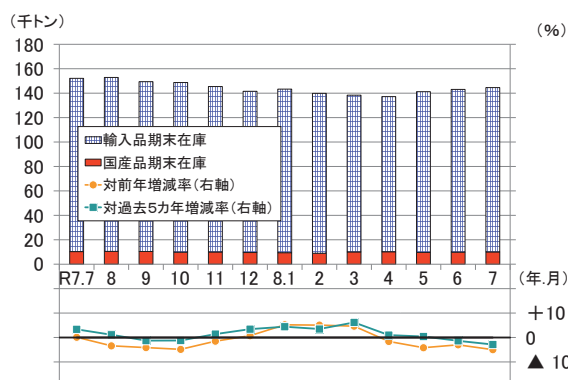
（注3）1世帯当たりの数値を当該月の世帯人数で除して算出。

推定期末在庫・推定出回り量

7月の推定期末在庫^{（注4）}は、14万4582トン（前年同月比5.0%減）と前年同月をやや下回った（図4）。このうち、国産品は1万65トン（同2.6%減）とわずかに、在庫の大部分を占める輸入品は13万4517トン（同5.2%減）とやや、いずれも前年同月を下回った。

推定出回り量^{（注4）}は、7万2546トン（同1.2%減）と前年同月をわずかに下回った（図5）。このうち、国産品は3万411トン（同2.1%増）と前年同月をわずかに上回った一方、輸入品は4万2135トン（同3.4%減）と前年同月をやや下回った。

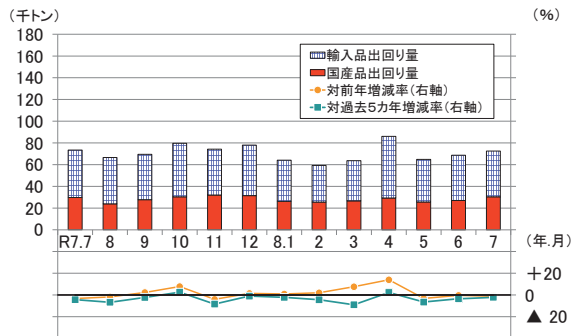
図4 牛肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(注4) 令和8年7月以降の期末在庫調査において、一部回答不可能な倉庫があることから、当該倉庫の在庫量は9月公表分から推定値を採用し、出回り量および期末在庫量については、当該推定値を用いて算出した。

図5 牛肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

「2026年9月号の記事に関する更新について」

『畜産の情報』2026年9月号の掲載記事のうち「推定期末在庫・推定出回り量」において、発行日以降、2026年6月の各データを再算出したことに伴い、一部内容を更新しました。更新記事につきましては、機構HPの掲載ページをご覧ください (https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_004367.html)

(畜産振興部)

豚 肉

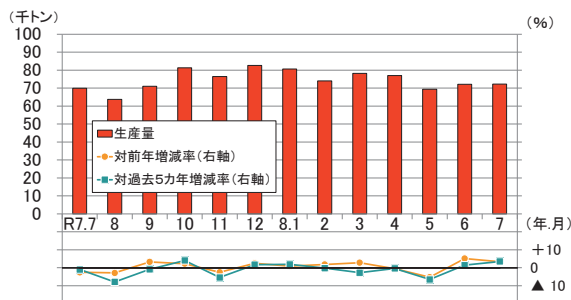
8年7月の豚肉生産量、前年同月比3.3%増

生産量

令和8年7月の豚肉生産量は、7万2197トン（前年同月比3.3%増）と前年同月をやや上回った（図1）。

なお、過去5カ年の7月の平均生産量との比較でも、3.5%増とやや上回る結果となった。

図1 豚肉生産量の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

輸入量

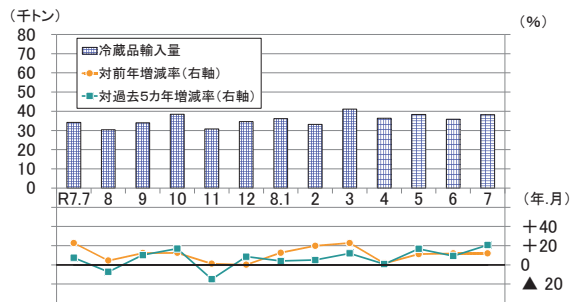
7月の輸入量について、冷蔵品は、主要輸入先である米国産、カナダ産、メキシコ産のいずれも増加し、3万8250トン（前年同月比11.9%増）と前年同月をかなり大きく上回った（図2）。冷凍品は、アフリカ豚熱発生による輸入一時停止措置^(注1)の影響でスペイン産が減少した中、代替としてブラジル産、オランダ産、米国産、デンマーク産などが増加し、5万4472トン（同12.3%増）と前年同月をかなり大きく上回った（図3）。この結果、輸入量の合計^(注2)でも、9万2726トン（同12.1%増）と前年同月をかなり大きく上回った。

なお、過去5カ年の7月の平均輸入量との比較でも、冷蔵品は20.7%増と大幅に、冷凍品は12.2%増とかなり大きく、いずれも上回る結果となった。

(注1) 農林水産省は、令和7年11月28日にスペイン産豚肉等の輸入を一時停止。その後、同年10月29日以前にと殺・加工・梱包まで終了しているものであり、かつ輸出されるまでの間、防疫上安全かつ衛生的に保管および輸送されたものであることをスペイン政府が証明しているものについては、輸入停止措置の対象外とすることを発表。

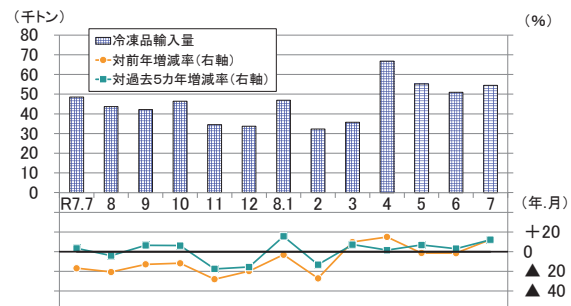
(注2) 輸入量の合計は、くず肉を含む。

図2 冷蔵豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

図3 冷凍豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

家計消費量

7月の豚肉の家計消費量（全国1人当たり）^(注3)は、635グラム（前年同月比5.3%増）と前年同月をやや上回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の7月の平均消費量との比較でも、5.4%増とやや上回る結果となった。

(注3) 1世帯当たりの数値を当該月の世帯人数で除して算出。

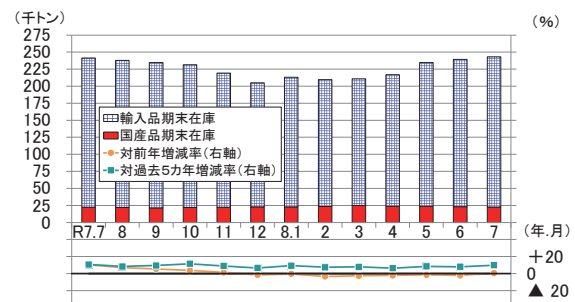
推定期末在庫・推定出回り量

7月の推定期末在庫^(注4)は、24万3053トン（前年同月比0.6%増）と前年同月をわずかに上回った（図4）。このうち、国産品は2万2651トン（同1.1%増）、在庫の大部分を占める輸入品は22万402トン（同0.6%増）と、ともに前年同月をわずかに上回った。

推定出回り量^(注4)は、16万972トン（同3.4%増）と前年同月をやや上回った（図5）。このうち、国産品は7万2469トン（同1.5%増）とわずかに、輸入品は8万8503トン（同5.0%増）とやや、いずれも前年同月を上回る結果となった。

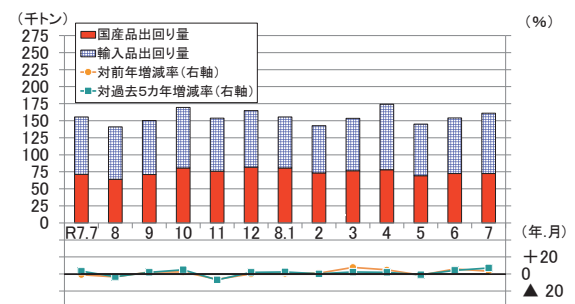
(注4) 令和8年7月以降の期末在庫調査において、一部回答不可能な倉庫があることから、当該倉庫の在庫量は9月公表分から推定値を採用し、出回り量および期末在庫量については、当該推定値を用いて算出した。

図4 豚肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図5 豚肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

「2026年9月号の記事に関する更新について」

『畜産の情報』2026年9月号の掲載記事のうち「推定期末在庫・推定出回り量」において、発行日以降、2026年6月の各データを再算出したことに伴い、一部内容を更新しました。更新記事につきましては、機構HP

の掲載ページをご覧ください (https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_004368.html)

(畜産振興部)

鶏 肉

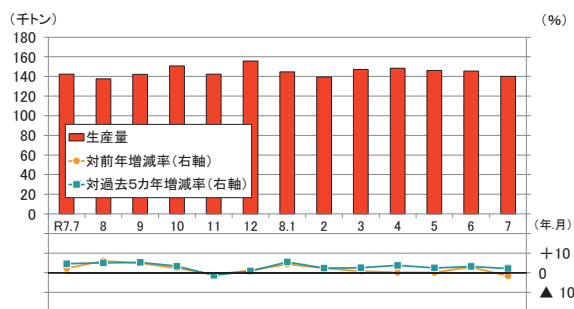
8年7月の鶏肉生産量、前年同月比1.6%減

生産量

令和8年7月の鶏肉生産量は、14万167トン（前年同月比1.6%減）と前年同月をわずかに下回った（図1）。

なお、過去5カ年の7月の平均生産量との比較では、2.2%増とわずかに上回る結果となった。

図1 鶏肉生産量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ
注1：骨付き肉ベース。
注2：成鶏肉を含む。

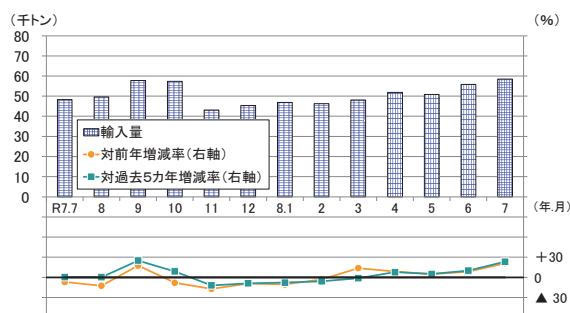
輸入量

7月の輸入量は、主要輸入先のブラジルでの生産が堅調で、前年同月のブラジル産輸入量が少なかったことなどもあり、5万8478トン（前年同月比21.2%増）と前年同月を

大幅に上回った（図2）。

なお、過去5カ年の7月の平均輸入量との比較でも、23.3%増と大幅に上回る結果となった。

図2 鶏肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：鶏肉以外の家きん肉を含まない。

家計消費量

7月の鶏肉の家計消費量（全国1人当たり）^(注1)は、516グラム（前年同月比3.1%増）と前年同月をやや上回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の7月の平均消費量との比較でも、5.9%増とやや上回る結果となった。

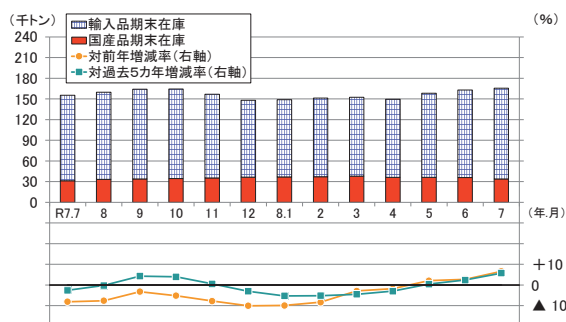
（注1）1世帯当たりの数値を当該月の世帯人数で除して算出。

推定期末在庫・推定出回り量

7月の推定期末在庫^(注2)は、16万5659トン（前年同月比6.6%増）と前年同月をかなりの程度上回った（図3）。このうち、輸入品は13万1660トン（同6.1%増）と前年同月をかなりの程度上回った。

推定出回り量^(注2)は、19万5927トン（同1.1%増）と前年同月をわずかに上回った（図4）。このうち、国産品は14万2062トン（同0.8%増）、輸入品は5万3865トン（同1.7%増）と、ともに前年同月をわずかに上回った。

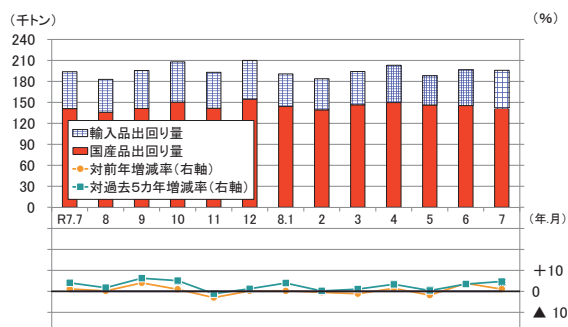
図3 鶏肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

（注2）令和8年7月以降の期末在庫調査において、一部回答不可能な倉庫があることから、当該倉庫の在庫量は9月公表分から推定値を採用し、出回り量及び期末在庫量については、当該推定値を用いて算出した。

図4 鶏肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

「2026年9月号の記事に関する更新について」

『畜産の情報』2026年9月号の掲載記事のうち「推定期末在庫・推定出回り量」において、発行日以降、2026年6月の各データを再算出したことに伴い、一部内容を更新しました。更新記事につきましては、機構HPの掲載ページをご覧ください（https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_004369.html）

（畜産振興部）

牛乳・乳製品

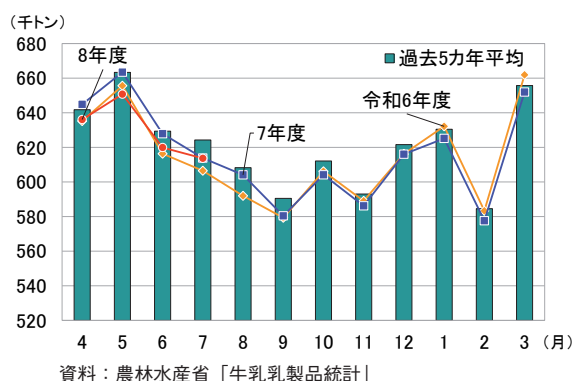
8年7月の生乳生産量は前年同月並み

7月の北海道の生乳生産量、7カ月ぶりに前年超え

令和8年7月の生乳生産量は、61万3658トン（前年同月比0.0%減）と前年同月並み

の水準となった（図1）。地域別では、暑熱の影響が少なかった北海道が、36万6562トン（同0.9%増）と7カ月ぶりに前年同月を上回った。一方、都府県は24万7096トン（同1.4%減）と11カ月連続で下回った。

図1 生乳生産量の推移



7月の生乳処理量を見用途別に見ると、牛乳等向けは31万7958トン（同4.1%減）と、12カ月連続で前年同月を下回った。また、業務用向けは2万1007トン（同4.3%減）と14カ月連続で前年同月を下回った。

乳製品向けは29万2186トン（4.8%増）と、牛乳等向けの需要の落ち込みにより5カ月ぶりに前年同月を上回った。これを品目別に見ると、クリーム向けは5万9696トン（同2.9%増）と9カ月ぶりに上回り、チーズ向けは3万8409トン（同8.9%増）と11カ月連続で上回った。また、脱脂粉乳・バター等向けは14万5724トン（同6.6%増）となり、5カ月ぶりに前年同月を上回った（農畜産業振興機構調べ「交付対象事業者別の販売生乳数量等」）。

7月の牛乳生産量、前年同月を12カ月連続で下回る

7月の牛乳等生産量を見ると、飲用牛乳等のうち牛乳は、25万5734キロリットル（前年同月比2.9%減）と12カ月連続で前年同月を下回った。成分調整牛乳や加工乳は値上げが影響し減少率が大きく、成分調整牛乳が1万5962キロリットル（同11.2%減）と24カ月連続で前年同月を下回り、加工乳が

9717キロリットル（同14.0%減）と12カ月連続で前年同月を下回った。

一方、はっ酵乳については大容量タイプや高たんぱく商品が堅調に推移しており、9万3844キロリットル（同2.8%増）と2カ月連続で前年同月を上回った。

7月末のバターの在庫量、23カ月連続で上回る

7月のバターの生産量は、脱脂粉乳・バター向け等が増える中、乳成分中の乳脂率が夏場に入っても高い値を維持しており、5996トン（前年同月比9.6%増）と2カ月連続で前年同月を上回った（図2）。在庫量については、需要を上回る供給が続いていると考えられ、7月末は3万8962トン（同20.7%増）と23カ月連続で積み増した（図3）。

図2 バターの生産量の推移

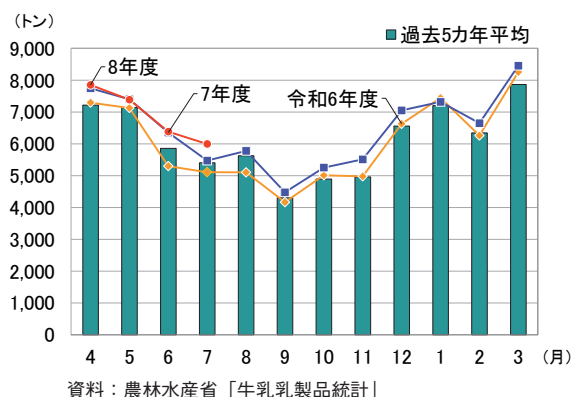
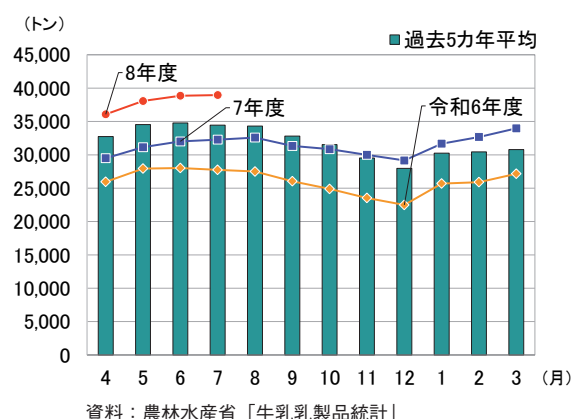


図3 バターの在庫量の推移



推定出回り量は6211トン（同0.8%増）と、2カ月連続で前年同月を上回った（農畜産業振興機構調べ）。

7月末の脱脂粉乳の在庫量、前年同月比25.6%増

7月の脱脂粉乳の生産量は、乳成分中の無脂肪固形分が高く、1万2379トン（前年同月比8.9%増）と5カ月ぶりに前年同月を上回った。需要を上回る供給が続いていることから、在庫量については、7月末は7万9756トン（同25.6%増）と20カ月連続で前年同月を上回った（図4、5）。推定出回り量は、民間による在庫削減対策の効果もあり、1万2089トン（同2.6%増）と2カ月連続で前年同月を上回った。（農畜産業振興機構調べ）。

図4 脱脂粉乳の生産量の推移

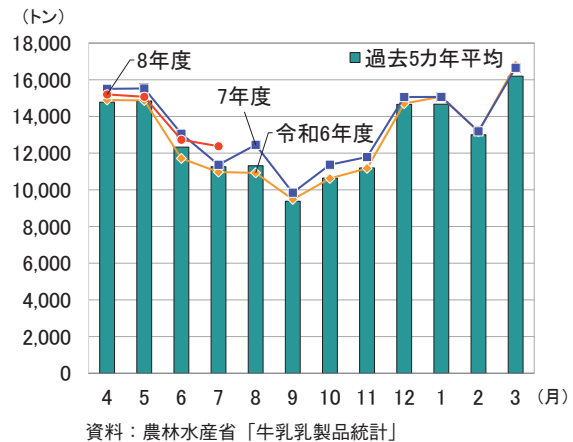
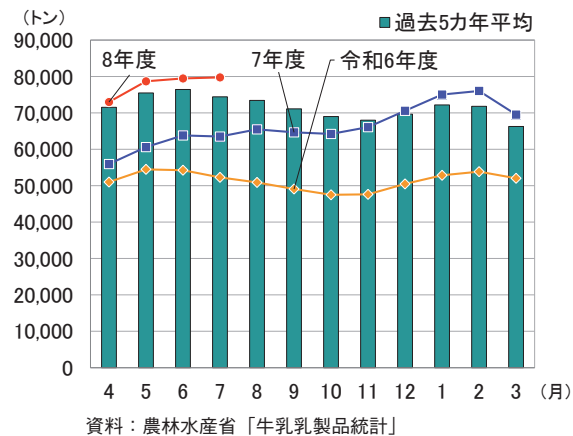


図5 脱脂粉乳の在庫量の推移



（酪農乳業部）

鶏 卵

8年8月の鶏卵卸売価格、前年同月比5.8%安

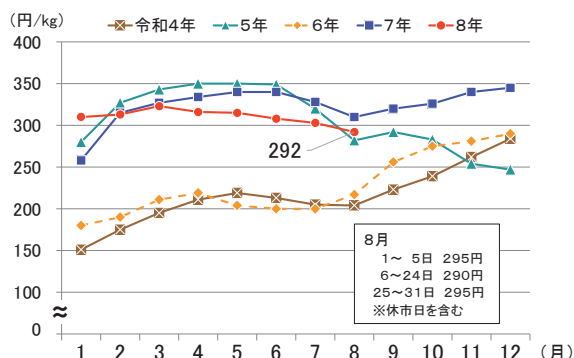
卸売価格

令和8年8月の鶏卵の卸売価格（JA全農たまご（株）の荷受相場の東京Mサイズ基準値）は、1キログラム当たり292円（前年同月差18円安、前年同月比5.8%安）と、前年同月の同価格をやや下回った（図）。同価格の日ごとの推移を見ると、月初の同295円から6日には同290円と下落し、25日には同295円と上昇し、月間の下落幅は同0円

となった。なお、過去5カ年の8月の平均卸売価格は246円であり、それと比較すると、18.7%高と大幅に上回る結果となった。

供給面について、暑さにより卵重の低下などが見られ、一部の産地で暑熱による採卵鶏の死亡も確認されるなど、夏季特有の影響が表れた。需要面について、量販筋、業務筋ともに不需要期に入り、鈍化傾向となった（全国農業協同組合連合会「鶏卵情勢」）。

図 鶏卵の卸売価格の推移



資料：JA全農たまご株式会社「相場情報」
注：消費税を含まない。

家計消費量

7月の鶏卵の家計消費量（全国1人当たり）^(注)は、905グラム（前年同月比0.6%増）と前年同月をわずかに上回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の7月の平均消費量との比較でも、3.5%増とやや上回る結果となった。

（注）1世帯当たりの数値を当該月の世帯人数で除して算出。

（畜産振興部）

令和8年「畜産統計」について

農林水産省が令和8年7月28日に公表した「畜産統計（令和8年2月1日現在）」について、肉用牛、乳用牛、豚、ブロイラーおよび採卵鶏の概要を以下の通り報告する。

なお、令和7年は2025年農林業センサス実施年のため、豚、ブロイラーおよび採卵鶏の調査は行われていない。このため、本稿においては、前回調査結果との比較対象を、肉用牛および乳用牛は令和7年、豚、ブロイラーおよび採卵鶏は令和6年とした。

【肉用牛】飼養戸数、飼養頭数ともに前年比減

飼養頭数、肉用種は前年比5.2%減、乳用種も同3.5%減

肉用牛の飼養戸数は、小規模層を中心に減少傾向で推移しており、令和8年は3万1800戸（前年比6.5%減）と前年からかなりの程度減少した（表1）。飼養頭数は、247万3000頭（同4.7%減）と前年からやや減少し、3年連続の減少となった。この

結果、肉用牛の1戸当たり飼養頭数は前年から1.5頭増加し、77.8頭となった。

肉用牛は、肉用種および乳用種^(注1)に大別され、飼養頭数のうち約7割を占める肉用種は175万5000頭（同5.2%減）、約3割を占める乳用種は71万7600頭（同3.5%減）と、ともに前年からやや減少した（図1）。

肉用種の内訳を見ると、子取り用めす牛は前年比5.9%減の57万5500頭（肉用牛全体に占める割合は23%）、肥育用牛は同4.3%減の79万7500頭（同32%）、育成牛は同5.9%減の38万2200頭（同15%）と、いずれも前年からやや減少した（図2）。

乳用種の内訳を見ると、交雑種は同3.4%減の54万300頭（同22%）、ホルスタイン種ほかは同3.8%減の17万7400頭（同7%）と、ともに前年からやや減少した。

（注1）「畜産統計」では、乳用種の肉用牛とは、ホルスタイン種、ジャージー種などの乳用種の牛のうち、肉用を目的に飼養している牛で、乳用種と肉用種の交雑種を含むと定義されている。

表1 肉用牛の飼養戸数・頭数および1戸当たり飼養頭数の推移

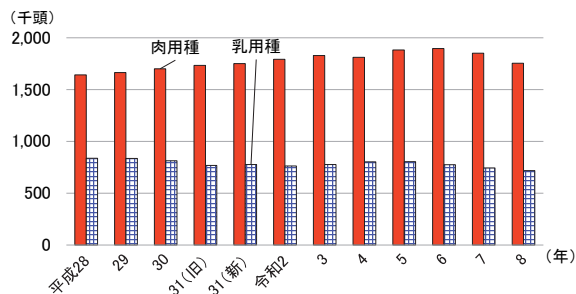
年	全国飼養戸数		全国飼養頭数												1戸当たり 飼養頭数	
			合計		肉用種				乳用種							
					うち子取り用めす牛								交雑種			
	(戸)	前年比 (増減率)	(千頭)	前年比 (増減率)	(千頭)	前年比 (増減率)	(千頭)	前年比 (増減率)	(千頭)	前年比 (増減率)	(千頭)	前年比 (増減率)	(千頭)	前年比 (増減率)	(頭)	前年差 (頭)
令和4年	40,400	▲4.0%	2,614.0	0.3%	1,812.0	▲0.9%	636.8	0.6%	802.2	3.4%	555.3	5.6%	246.9	▲1.2%	64.7	2.8
5年	38,600	▲4.5%	2,687.0	2.8%	1,882.0	3.9%	645.2	1.3%	804.4	0.3%	569.6	2.6%	234.8	▲4.9%	69.6	4.9
6年	36,500	▲5.4%	2,672.0	▲0.6%	1,897.0	0.8%	640.4	▲0.7%	775.1	▲3.6%	567.2	▲0.4%	207.9	▲11.5%	73.2	3.6
7年	34,000	▲6.8%	2,595.0	▲2.9%	1,851.0	▲2.4%	611.4	▲4.5%	743.8	▲4.0%	559.4	▲1.4%	184.4	▲11.3%	76.3	3.1
8年	31,800	▲6.5%	2,473.0	▲4.7%	1,755.0	▲5.2%	575.5	▲5.9%	717.6	▲3.5%	540.3	▲3.4%	177.4	▲3.8%	77.8	1.5

資料：農林水産省「畜産統計」

注1：数値は各年2月1日現在。

注2：計数は、四捨五入のため、合計において一致しない場合がある。

図1 肉用牛飼養頭数の推移

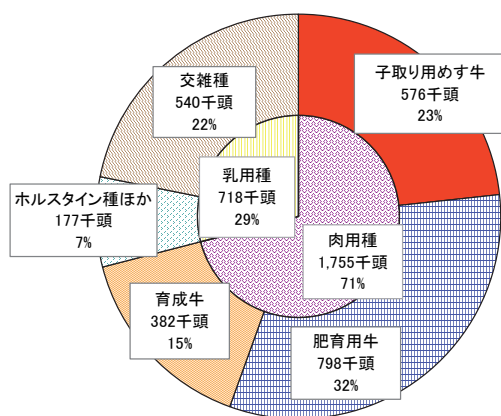


資料：農林水産省「畜産統計」

注1：数値は各年2月1日現在。

注2：平成31年（旧）までは従来実施してきた飼養者を対象とした統計調査、平成31年（新）および令和2年以降は牛個体識別全国データベースなどの行政記録情報や関係統計により集計した加工統計であり、統計手法が異なる。

図2 令和8年肉用牛飼養頭数の内訳



資料：農林水産省「畜産統計」

注1：数値は2月1日現在。

注2：計数は、四捨五入のため、合計において一致しない場合がある。

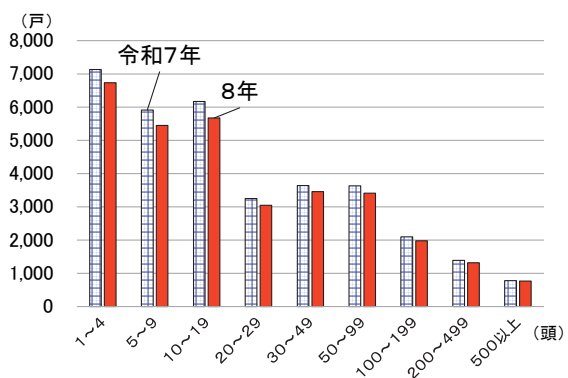
飼養戸数、飼養頭数、すべての階層で前年比減

肉用牛の総飼養頭数規模別の飼養戸数については、すべての階層で前年を下回った

(図3)。同飼養戸数は、1～4頭の階層が最も多く、6730戸（前年比5.6%減）と全体の21%を、次いで10～19頭の階層が5670戸（同8.1%減）と同18%を、5～9頭の階層が5450戸（同7.8%減）と同17%を占める結果となった。また、500頭以上の階層は766戸（同1.8%減）と同2%、200～499頭の階層は1320戸（同5.0%減）と同4%を占める結果となった。なお、各階層の同割合は、すべて前年と同じ割合となった。

肉用牛の総飼養頭数規模別の飼養頭数についても、すべての階層で前年を下回った（図4）。同飼養頭数は、500頭以上の階層が最も多く、全体の46%を占める113万6000頭（同3.0%減）と、次いで200～499頭の階層が同17%を占める42万2200頭（同

図3 肉用牛総飼養頭数規模別飼養戸数の推移

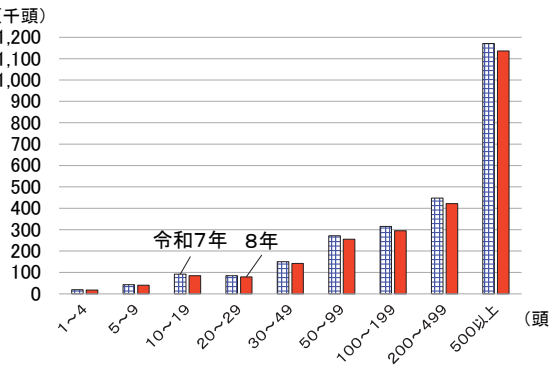


資料：農林水産省「畜産統計」

注：数値は各年2月1日現在。

5.6%減)となった。これら上位2階層の同割合は63%と同1ポイント増加した。

図4 肉用牛総飼養頭数規模別飼養頭数の推移



資料：農林水産省「畜産統計」
注：数値は各年2月1日現在。

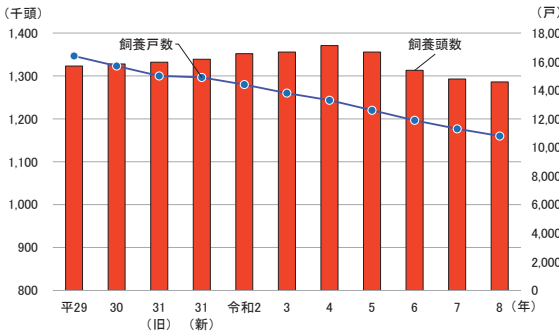
【乳用牛】全国の飼養戸数は減少するも規模拡大は進展

全国の飼養戸数は1万800戸

乳用牛を飼養する戸数は前年割れが継続しており、令和8年2月1日現在では、1万800戸(前年比4.4%減)と前年をやや下回った(図5)。地域別に見ると、北海道では4800戸(同3.4%減)、都府県でも6050戸(同4.7%減)といずれも前年をやや下回った(表2)。また、乳用牛飼養頭数は、128万

6000頭(同0.5%減)と4年連続での減少となった。地域別に見ると、北海道が81万9800頭(同0.4%増)と前年を上回った一方、都府県が46万6000頭(同2.1%減)と前年を下回った。酪農家の規模拡大は進展しており、1戸当たりの飼養頭数は前年から4.7頭増加し、119.1頭(同4.1%増)となった。地域別では、北海道が170.8頭(同4.0%増)、都府県が77.0頭(同2.7%増)といずれも増加した。

図5 乳用牛飼養頭数・飼養戸数の推移



資料：農林水産省「畜産統計」
注1：数値は各年2月1日現在。
注2：平成31年(旧)までは従来実施してきた飼養者を対象とした統計調査、平成31年(新)および令和2年以降は牛個体識別全国データベースなどの行政記録情報や関係統計により集計した加工統計であり、統計手法が異なる。

表2 令和8年 乳用牛の全国農業地域別飼養動向

地域	令和8年					
	飼養戸数 (戸)	前年比 (増減率)	飼養頭数 (頭)	前年比 (増減率)	1戸当たり 飼養頭数 (頭)	前年比 (増減率)
北海道	4,800	▲3.4%	819,800	0.4%	170.8	4.0%
都府県	6,050	▲4.7%	466,000	▲2.1%	77.0	2.7%
東北	1,480	▲4.5%	85,700	▲2.1%	57.9	2.5%
北陸	182	▲10.8%	9,600	▲7.7%	52.7	3.3%
関東・東山	1,860	▲5.1%	155,100	▲1.3%	83.4	4.0%
東海	412	▲5.5%	40,800	▲3.1%	99.0	2.5%
近畿	293	▲5.5%	20,700	▲4.6%	70.6	0.9%
中国	461	▲4.6%	43,400	▲1.8%	94.1	2.8%
四国	218	▲4.0%	15,200	▲0.7%	69.7	3.4%
九州	1,070	▲4.5%	91,900	▲2.4%	85.9	2.1%
沖縄	65	0.0	3,660	2.5%	56.3	2.6%
全国	10,800	▲4.4%	1,286,000	▲0.5%	119.1	4.1%

資料：農林水産省「畜産統計」(令和8年2月1日現在)
注：計数は、四捨五入のため、合計において一致しない場合がある。

飼養頭数「100頭以上」の階層、全体の半数を占める

乳用牛飼養戸数を成畜（満2歳以上の牛および2歳未満の経産牛。以下同じ）の飼養頭数規模別に見ると、100頭未満の階層はいずれも減少し、「100頭以上」の階層についても2113戸（前年比2.1%減）と前年からわずかに減少したが、このうち「200頭以上」の階層については、713戸（同0.6%増）と前年からわずかに増加し、経営の規模拡大が

進んでいることがうかがえる（表3）。

また、乳用牛飼養頭数を成畜の飼養頭数規模別に見ると、100頭未満の階層については、「1～19頭」および「50～79頭」の階層を除き減少した一方、「100頭以上」の階層が71万9000頭（同0.6%増）と前年からわずかに増加し、全体の55.9%を占めた。このうち「200頭以上」の階層は、43万7200頭（同2.7%増）とわずかに増加し、全体の34.0%を占めるまで伸長していることがうかがえる。

表3 乳用牛の飼養頭数規模別飼養戸数・飼養頭数の推移

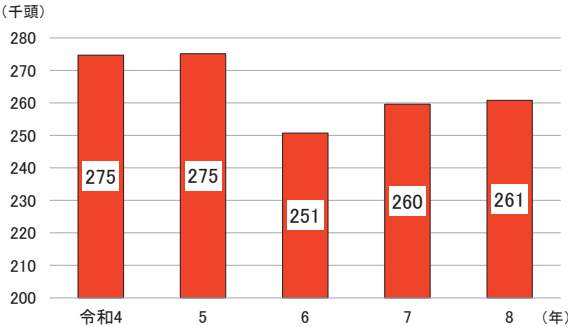
区分		令和4年	5年	6年	7年	8年	前年比 (増減率)	飼養戸数/頭数 別階層比
全国飼養戸数（戸）		13,300	12,600	11,900	11,300	10,800	▲4.4%	100.0%
乳用牛 成畜飼養頭数 規模別飼養戸数 (戸)	1～19頭	2,510	2,460	2,260	2,090	2,030	▲2.9%	18.8%
	20～29頭	1,590	1,420	1,280	1,170	1,060	▲9.4%	9.8%
	30～49頭	3,120	2,860	2,650	2,460	2,300	▲6.5%	21.3%
	50～79頭	2,750	2,600	2,460	2,360	2,310	▲2.1%	21.4%
	80～99頭	917	871	859	860	808	▲6.0%	7.5%
	100頭以上	2,119	2,105	2,152	2,159	2,113	▲2.1%	19.6%
		200頭以上	669	675	692	709	0.6%	6.6%
全国飼養頭数（千頭）		1,371	1,356	1,313	1,293	1,286	▲0.5%	100.0%
乳用牛 成畜飼養頭数 規模別飼養頭数 (千頭)	1～19頭	59	62	50	45	48	6.7%	3.7%
	20～29頭	62	54	53	46	41	▲9.9%	3.2%
	30～49頭	175	167	148	142	132	▲6.8%	10.3%
	50～79頭	257	247	229	218	219	0.7%	17.1%
	80～99頭	121	118	112	113	111	▲2.3%	8.6%
	100頭以上	680	689	708	715	719	0.6%	55.9%
		200頭以上	392	403	413	426	2.7%	34.0%

資料：農林水産省「畜産統計」
注1：数値は各年2月1日現在。
注2：全国飼養戸数及び全国飼養頭数は子畜を含む。
注3：計数は、四捨五入のため、合計において一致しない場合がある。

乳用種めす出生頭数、0.5%増加

直近1年間(令和7年2月～令和8年1月)の乳用種めす出生頭数は、26万800頭（前年同期比0.5%増）と2年連続での増加となり、頭数が回復傾向であることがうかがえる（図6）。

図6 乳用牛出生頭数（乳用種めす）の推移



資料：農林水産省「畜産統計」
注：出生頭数は前年2月から本年1月までの1年間。

【豚】飼養戸数、飼養頭数ともに前回比減

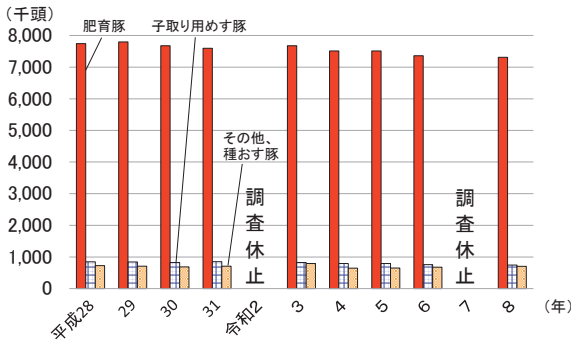
飼養頭数、肥育豚は前回比0.7%減、子取り用めす豚は同2.0%減

豚の飼養戸数は、小規模層を中心に減少傾向で推移しており、令和8年は2880戸（前回比8.0%減）と前回からかなりの程度減少した（表4）。飼養頭数は、875万6000頭（同0.5%減）と前回からわずかに減少した（図7）。この結果、豚の1戸当たり飼養頭数は、前回から229.4頭増加し、3040.3頭となった。

内訳を見ると、子取り用めす豚は前回比2.0%減の74万3300頭とわずかに、肥育豚は同0.7%減の730万9000頭とわずかに、

種おす豚は同10.1%減の2万2300頭とかなりの程度、いずれも前回から減少した一方、その他（販売される肥育用のもと豚を含む）は同4.3%増の68万1500頭と前回からやや増加した。

図7 豚飼養頭数の推移



資料：農林水産省「畜産統計」
注1：数値は各年2月1日現在。
注2：令和2年は2020年農林業センサス、令和7年は2025年農林業センサス実施年のため、調査休止。

表4 豚の飼養戸数・頭数および1戸当たり飼養頭数の推移

年	全国飼養戸数		全国飼養頭数										1戸当たり飼養頭数	
	(戸)	前年比 (増減率)	合計		子取り用めす豚		種おす豚		肥育豚		その他		(頭)	前年差 (頭)
			(千頭)	前年比 (増減率)	(千頭)	前年比 (増減率)	(千頭)	前年比 (増減率)	(千頭)	前年比 (増減率)	(千頭)	前年比 (増減率)		
令和3年	3,850	▲10.9%	9,290.0	1.5%	823.2	▲3.5%	32.0	▲11.8%	7,676.0	1.1%	758.8	12.7%	2,413.0	293.6
4年	3,590	▲6.8%	8,949.0	▲3.7%	789.1	▲4.1%	30.0	▲6.3%	7,515.0	▲2.1%	615.4	▲18.9%	2,492.8	79.8
5年	3,370	▲6.1%	8,956.0	0.1%	791.8	0.3%	26.8	▲10.7%	7,512.0	▲0.0%	625.4	1.6%	2,657.6	164.8
6年	3,130	▲7.1%	8,798.0	▲1.8%	758.3	▲4.2%	24.8	▲7.5%	7,362.0	▲2.0%	653.1	4.4%	2,810.9	153.3
7年	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
8年	2,880	▲8.0%	8,756.0	▲0.5%	743.3	▲2.0%	22.3	▲10.1%	7,309.0	▲0.7%	681.5	4.3%	3,040.3	229.4

資料：農林水産省「畜産統計」
注1：数値は各年2月1日現在。
注2：計数は、四捨五入のため、合計において一致しない場合がある。
注3：その他とは、肥育豚、子取り用めす豚および種おす豚以外の豚。また、肥育用のもと豚として販売する場合も含む。
注4：令和7年は2025年農林業センサス実施年のため、調査休止。
注5：令和3年は平成31年と比較している。

飼養頭数「3000頭以上」の階層で、全体の約7割を占める

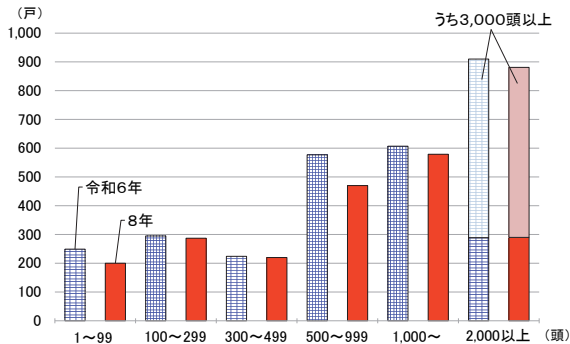
肥育豚の飼養頭数規模別の飼養戸数については、すべての階層で前回を下回った（図8）。同飼養戸数は、2000頭以上の階層が最も多く、全体の33%を占める881戸（前回比

3.2%減）、次いで1000～1999頭の階層が同22%を占める579戸（同4.6%減）、500～999頭の階層が同18%を占める470戸（同18.5%減）となった。これら上位3階層の同割合は、前回と同じ73%となった。このうち3000頭以上の階層は、同22%を

占める591戸となった。

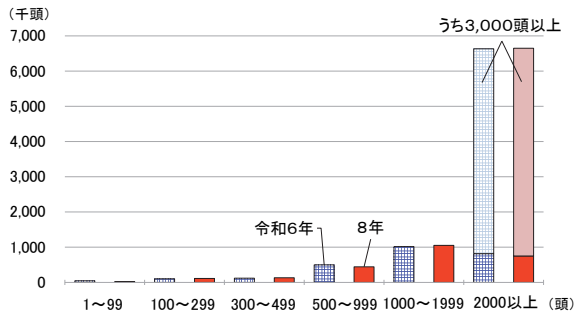
肥育豚の飼養頭数規模別の飼養頭数については、1～99頭の階層および500～999頭の2階層はいずれも前回を下回った一方、その他の4階層はいずれも前回を上回った（図9）。同飼養頭数は、2000頭以上の階層が最も多く、全体の79%を占める665万頭（同0.2%増）となった。このうち3000頭以上の階層は、同70%を占める589万9000頭（同1.4%増）となった。

図8 肥育豚の飼養頭数規模別飼養戸数の推移



資料：農林水産省「畜産統計」
注1：数値は各年2月1日現在。
注2：学校、試験場などの非営利的な飼養者は含まない。
注3：令和7年は2025年農林業センサス実施年のため、調査休止。

図9 肥育豚の飼養頭数規模別飼養頭数の推移



資料：農林水産省「畜産統計」
注1：数値は各年2月1日現在。
注2：飼養頭数は、各階層の飼養者が飼養しているすべての豚（子取り用豚、種用豚、その他（肥育用のもと豚など）を含む）である。
注3：学校、試験場などの非営利的な飼養者は含まない。
注4：令和7年は2025年農林業センサス実施年のため、調査休止。

【ブロイラー】飼養羽数は前回比減、出荷羽数は前回比増

飼養羽数は前回比3.6%減、出荷羽数は同1.2%増

ブロイラーの飼養戸数は、中規模層を中心に減少傾向で推移しており、令和8年は1960戸（前回比4.4%減）、出荷戸数は2000戸（同4.8%減）と、ともに前回からやや減少した（表5）。また、飼養羽数（注2）は1億3959万9000羽（同3.6%減）と

表5 ブロイラーの飼養戸数・羽数、出荷戸数・羽数、1戸当たり飼養羽数および出荷羽数の推移

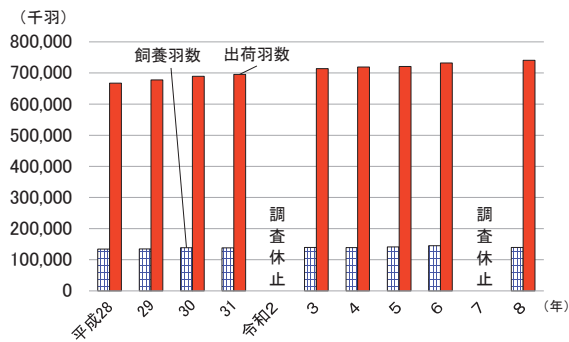
年	全国飼養戸数		全国飼養羽数		1戸当たり飼養羽数		全国出荷戸数		全国出荷羽数		1戸当たり出荷羽数	
	(戸)	前年比(増減率)	(千羽)	前年比(増減率)	(千羽)	前年差(千羽)	(戸)	前年比(増減率)	(千羽)	前年比(増減率)	(千羽)	前年差(千羽)
令和3年	2,160	▲4.0%	139,658	1.0%	64.7	3.3	2,190	▲3.1%	713,834	2.7%	326.0	18.3
4年	2,100	▲2.8%	139,230	▲0.3%	66.3	1.6	2,150	▲1.8%	719,259	0.8%	334.5	8.5
5年	2,100	0.0%	141,463	1.6%	67.4	1.1	2,120	▲1.4%	720,878	0.2%	340.0	5.5
6年	2,050	▲2.4%	144,859	2.4%	70.7	3.3	2,100	▲0.9%	731,929	1.5%	348.5	8.5
7年	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
8年	1,960	▲4.4%	139,599	▲3.6%	71.2	0.5	2,000	▲4.8%	740,539	1.2%	370.3	21.8

資料：農林水産省「畜産統計」
注1：数値は各年2月1日現在。ただし、出荷羽数は前年2月2日～本年2月1日の1年間。
注2：飼養戸数・羽数、出荷戸数・羽数には、年間出荷羽数3000羽未満の飼養者を含まない。
注3：飼養羽数とは、2月1日現在で飼養している鶏のうち、ふ化後3カ月未満で出荷予定の鶏の飼養羽数をいう。
注4：各年2月1日現在で飼養のない場合でも、過去1年間に3000羽以上の出荷があれば出荷戸数に含める。
注5：令和7年は2025年農林業センサス実施年のため、調査休止。
注6：令和3年は平成31年と比較している。

前回からやや減少した一方、出荷羽数^(注3)は7億4053万9000羽（同1.2%増）と前回からわずかに増加した（図10）。この結果、ブロイラーの1戸当たり飼養羽数は、前回から500羽増加し7万1200羽、1戸当たりの出荷羽数は、前回から2万1800羽増加し37万300羽となった。

（注2）飼養羽数とは、2月1日現在で飼養している鶏のうち、ふ化後3カ月未満で出荷予定の鶏の飼養羽数をいう。
（注3）出荷羽数とは、前年2月2日～本年2月1日の1年間に出荷した羽数をいう。2月1日現在で飼養を休止し、または中止している場合でも、年間3000羽以上の出荷があれば、羽数が計上されている。

図10 ブロイラー飼養羽数および出荷羽数の推移



資料：農林水産省「畜産統計」

注1：数値は各年2月1日現在。ただし、出荷羽数は前年2月2日～本年2月1日の1年間。

注2：飼養羽数、出荷羽数には、年間出荷羽数3000羽未満の飼養者を含まない。

注3：飼養羽数とは、2月1日現在で飼養している鶏のうち、ふ化後3カ月未満で出荷予定の鶏の飼養羽数をいう。

注4：令和2年は2020年農林業センサス、令和7年は2025年農林業センサス実施年のため、調査休止。

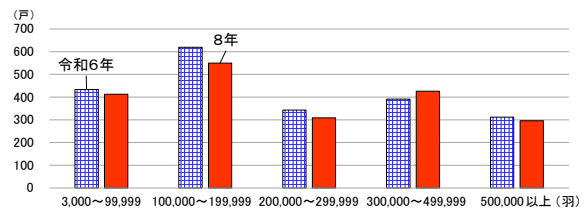
出荷羽数「50万羽以上」の階層、全体の半数を占める

ブロイラーの出荷羽数規模別の出荷戸数については、30万～49万9999羽の階層については前回を上回った一方、その他の4階層はいずれも前回を下回った（図11）。同出荷戸数は、10万～19万9999羽の階層が最も多く、全体の28%を占める550戸（前回比11.3%減）、次いで30万～49万9999羽の階層が同21%を占める426戸（同9.0%増）、

3000～9万9999羽の階層が同21%を占める413戸（同4.8%減）となった。

ブロイラーの出荷羽数規模別の出荷戸数については、出荷戸数と同様の傾向が見られ、3000～9万9999羽の階層および30万～49万9999羽の階層が前回を上回り、50万羽以上の階層では前回並みとなった一方、その他の2階層はいずれも前回を下回った（図12）。同出荷羽数は、50万羽以上の階層が最も多く、全体の52%を占める3億8742万8000羽、次いで30万～49万9999羽の階層が同23%を占める1億6926万4000羽（同16.4%増）となった。

図11 ブロイラー出荷羽数規模別出荷戸数の推移



資料：農林水産省「畜産統計」

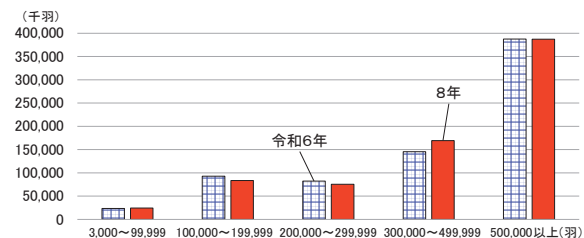
注1：出荷羽数は前年2月2日～本年2月1日の1年間。

注2：飼養羽数、出荷羽数には、年間出荷羽数3000羽未満の飼養者を含まない。

注3：学校、試験場などの非営利的な飼養者は含まない。

注4：令和7年は2025年農林業センサス実施年のため、調査休止。

図12 ブロイラー出荷羽数規模別出荷羽数の推移



資料：農林水産省「畜産統計」

注1：出荷羽数は前年2月2日～本年2月1日の1年間。

注2：飼養羽数、出荷羽数には、年間出荷羽数3000羽未満の飼養者を含まない。

注3：学校、試験場などの非営利的な飼養者は含まない。

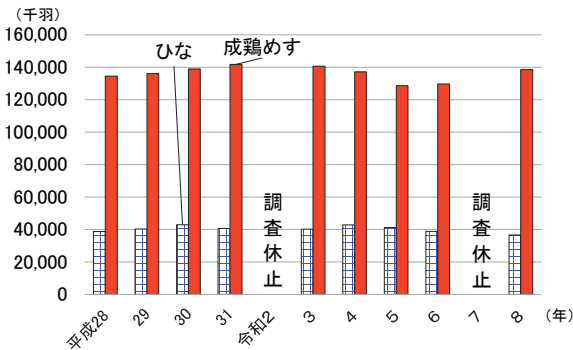
注4：令和7年は2025年農林業センサス実施年のため、調査休止。

【採卵鶏】飼養戸数は前回比減、飼養羽数は前回比増

飼養羽数、ひなは前回比5.7%減、成鶏めすは同6.8%増

採卵鶏の飼養戸数は、小規模層を中心に減少傾向で推移しており、令和8年は1510戸（前回比7.9%減）と、前回からかなりの程度減少した（表6）。また、飼養羽数は、ひなは3665万4000千羽（同5.7%減）と前回からやや減少した一方、成鶏めすは1億3860万2000羽（同6.8%増）と前回からかなりの程度増加した（図13）。この結果、成鶏めすの1戸当たり飼養羽数は、前回から1万2700羽増加し、9万1800羽となった。

図13 採卵鶏のひなおよび成鶏めす飼養羽数の推移



資料：農林水産省「畜産統計」
注1：各年2月1日現在。
注2：種鶏のみの飼養者を除く。
注3：種鶏を除く。
注4：令和2年は2020年農林業センサス、令和7年は2025年農林業センサス実施年のため、調査休止。

表6 採卵鶏飼養戸数・飼養羽数の推移

年	全国飼養戸数		全国飼養羽数						1戸当たり成鶏めす飼養羽数	
	(戸)	前年比(増減率)	合計		ひな (6カ月齢未満)		成鶏めす (6カ月齢以上)		(千羽)	前年差(千羽)
			(千羽)	前年比(増減率)	(千羽)	前年比(増減率)	(千羽)	前年比(増減率)		
令和3年	1,880	▲11.3%	180,918	▲0.8%	40,221	▲0.9%	140,697	▲0.8%	74.8	7.9
4年	1,810	▲3.7%	180,096	▲0.5%	42,805	6.4%	137,291	▲2.4%	75.9	1.1
5年	1,690	▲6.6%	169,810	▲5.7%	41,231	▲3.7%	128,579	▲6.3%	76.1	0.2
6年	1,640	▲3.0%	168,599	▲0.7%	38,870	▲5.7%	129,729	0.9%	79.1	3.0
7年	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
8年	1,510	▲7.9%	175,256	3.9%	36,654	▲5.7%	138,602	6.8%	91.8	12.7

資料：農林水産省「畜産統計」
注1：各年2月1日現在。
注2：種鶏のみの飼養者を除く。
注3：種鶏を除く。
注4：令和7年は2025年農林業センサス実施年のため、調査休止。
注5：令和3年は平成31年と比較している。

成鶏めす飼養羽数「10万羽以上」の階層、全体の約8割を占める

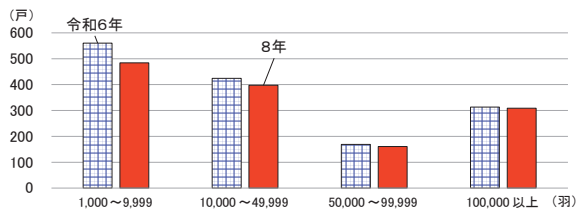
成鶏めすの飼養羽数規模別の飼養戸数については、すべての階層で前回を下回った（図14）。同飼養戸数は、1000～9999羽の階層が最も多く、全体の36%を占める484戸（前回比13.6%減）、次いで1万～4万9999

羽の階層が同29%を占める397戸（同6.4%減）、10万羽以上の階層が同23%を占める309戸（同1.3%減）、5万～9万9999羽の階層が同12%を占める161戸（同4.7%減）となった。

成鶏めすの飼養羽数規模別の飼養羽数については、1000～9万9999羽までの下位

3階層はいずれも前回を下回った一方、10万羽以上の階層は前回を上回った（図15）。同飼養羽数は、10万羽以上の階層が最も多く、全体の83%を占める1億1560万5000羽（同9.9%増）、次いで5万～9万9999羽の階層が同8%を占める1137万7000羽（同4.9%減）となった。

図14 成鶏めす飼養羽数規模別飼養戸数の推移



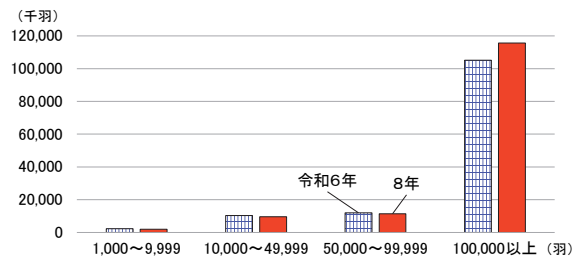
資料：農林水産省「畜産統計」

注1：各年2月1日現在。

注2：学校、試験場などの非営利的な飼養者は含まない。

注3：令和7年は2025年農林業センサス実施年のため、調査休止。

図15 成鶏めす飼養羽数規模別飼養羽数の推移



資料：農林水産省「畜産統計」

注1：各年2月1日現在。

注2：学校、試験場などの非営利的な飼養者は含まない。

注3：令和7年は2025年農林業センサス実施年のため、調査休止。

(畜産振興部、酪農乳業部)